

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720363

研究課題名(和文) 20世紀前半期南アフリカのカラードとブリティッシュ・アイデンティティに関する研究

研究課題名(英文) South African Coloureds and the British Identity in the First Half of the Twentieth Century

研究代表者

堀内 隆行(Horiuchi, Takayuki)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：90568346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀前半期南アフリカのカラード(南アフリカにおいては、他国のように有色人種の総称ではなく、ケープタウン周辺の先住民、解放奴隷、「混血」の人々の意)とブリティッシュ・アイデンティティについて探るものだった。

研究はふたつのケース・スタディにもとづいた。ひとつは、カラードが帝国の戦争としての第一次世界大戦にどう対処したかである。もうひとつは、カラードの意識が戦間期にどう変わっていったかである。

研究成果の概要(英文)：This study explored South African Coloureds (in South Africa, the word refers to indigenous people, emancipated slaves, and "mixed" inhabitants in and around Cape Town, while in other countries it is a general term used for the black population) and the British identity in the first half of the twentieth century.

This study was based on two case studies. The first focused on their attitudes toward the First World War as the Imperial one, while the second examined the change of their identity between the Wars.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西欧近現代史 南アフリカ史 イギリス帝国史 カラード ブリティッシュ・アイデンティティ

## 1. 研究開始当初の背景

近年、イギリス系のアイデンティティについて、南アフリカ史研究者の関心が高まりつつある。この高まりの背景は二点に大別することができる。

第一は、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど白人定住植民地 / 自治領のブリティッシュ・アイデンティティにかんするイギリス帝国史研究の拡大である。

第二は、アフリカン・ナショナリズムの脅威にたいするイギリス系の反発である。つまり、ポスト・アパルトヘイト期の南アフリカにおいては、ANC (アフリカ民族会議) 政権が歴史の語りをいかに政治的に利用しているか、という問題が争点となっている (1995 - 98 年の真実和解委員会、99 - 2002 年の第二次南アフリカ / アングロ・ボーア戦争 100 周年など)。

だが、近年の研究は南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティについても「ブリティッシュ・ワールド」(本国と植民地のイギリス人が織り成す世界) 全般についても、他のエスニック・グループにたいする開放性、多文化性を過度に強調している。このことは、イギリス系の民主同盟がアフリカーナ (オランダ系 / ボーア人) などの支持を集め、英語がアフリカーンス語などを圧倒している現状とも無縁ではない。

以上の研究にたいして、代表者は研究開始当初までさまざまに批判的に検討してきた。しかし、20 世紀前半期についてはアフリカーナとの関係にとどまり、非ヨーロッパ系との関係の分析にかんしては、ケープの多数派であるカラード (南アフリカにおいては、他国のように有色人種の総称ではなく、ケープタウン周辺の先住民、解放奴隷、「混血」の人々の意) の問題の概観を除いて欠いていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、20 世紀前半期南アフリカのカラードとブリティッシュ・アイデンティティとの関係について、この時代の画期となった第一次世界大戦のほか、カラードの意識が第一次大戦と第二次大戦とのあいだの時期にどのように変化していったかを探り、ブリティッシュ・アイデンティティの開放性、多文化性を強調する近年の研究を批判的に検討しつつ、イギリス帝国の植民地支配がカラードに親英であることを強いた状況の解明を目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究は、20 世紀前半期南アフリカのカラードとブリティッシュ・アイデンティティとの関係について、

まずこの時代の画期となった第一次世界大戦の意味を探り、

次いでカラードの意識が第一次大戦と第二次大戦とのあいだにどのように変化していったかを探った。

にかんしては、南アフリカ・ケープタウン (国立図書館、ケープタウン大学など) で、カラード・エリート層が結成した APO (アフリカ政治機構) の機関紙である『APO』、APO が組織したケープ歩兵軍団の従軍記などの史料を調査した。また、先行研究を手掛かりとしてイギリス系、アフリカ人などと大戦との関係を、とくに南アフリカ原住民労働派遣隊をめぐって探り、カラードの場合と比較した。さらに、戦争がカラード・アイデンティティに与えた長期的影響も展望した。

にかんしては、APO 議長 A・アブドゥラーマンの娘であるシシ・グール (1897 - 1963 年) の問題を中心に進めた。シシの史料も南アフリカ国立図書館、ケープタウン大学などに残されており、現地へ赴いた。

## 4. 研究成果

本研究は、20 世紀前半期南アフリカのカラードが有したブリティッシュ・アイデンティティ (ないしイギリス帝国への帰属意識) について探るものである。

研究には大別して二つの柱が存在した。

ひとつは、カラードが「帝国の戦争」としての第一次世界大戦にどう対処したかである。これについては『世界戦争』(現代の起点 第一次世界大戦第 1 巻、岩波書店、2014 年) に「南アフリカと第一次世界大戦」を執筆した。京都大学人文科学研究所共同研究班「第一次世界大戦の総合的研究」の成果でもあり、南アフリカと大戦という全体的文脈のなかで、カラードの問題にも光を当てた。

しかし、より重要な柱は、カラードの意識が第一次大戦と第二次大戦とのあいだの時期にどのように変化していったかである。これについては『女性史学』第 24 号に「シシ・グール像の形成 20 世紀南アフリカの一カラード・エリート女性をめぐって」を執筆した。内容は下記のとおりである。

ポスト・アパルトヘイト期の南アフリカにおいて、決定的な問題はプライベート・セクタと ANC 政権による歴史の政治的利用である。この文脈のなかで、シシ (ザイノネサ)・グールは活発に記憶されている。死後勲章が授与され、記念碑が建立され、伝記がその遺産を子どもたちに説明している。本論文は、近年のコメモレイションの歴史的背景としての、グールの生前の偶像化について探るものである。

グールはケープタウンに生まれた。父は医師で、曾祖父はインドにルーツをもつ解放奴隷だった。19 世紀末、ケープ植民地に「バントゥー系の」アフリカ人が大量に流入したことによって、非ヨーロッパ系にたいする人種差別が巻き起こった。この明白なレイシズム

に回答して、ケープタウンとその周辺の「黒人」エリートは20世紀初め、APOを結成したが、その議長はゲールの父だった。しかし、このエリートたちは自分たち自身を「カラード」と呼び、「原住民」(アフリカ人)より「文明」的であると主張した。父親の導きによって、ゲールは「文明化」のモデルとなった。少女時代から、その評判は上々だった。また、南アフリカ・カレッジ(今日のケープタウン大学)への入学を許可された最初の非ヨーロッパ系女性となった。

1930年代、「美しく雄弁な」ゲールは女性選挙権運動に参画し、まもなく南アフリカ共産党に注目されるようになった。1935年には、カラードの人民戦線である南アフリカ民族解放連盟の議長に推挙された。1938年にはケープタウン市会議員に選出され、生ける「ジャンヌ・ダルク」と称された。しかし他方で、APOやトロツキストとの関係も維持したため、アパルトヘイト期の南アフリカにおいてカラード社会を統合することができるシンボルとして機能した。その遺産は今日もなお似たような目的を担わされている。つまり、共産党と近い関係にあるANCへの賛否に揺れるカラードの統合に寄与しようとしているのである。

もっとも、研究期間の成果には下記も含まれる。

「イギリス帝国、ケープ、南アフリカ」(『新しい歴史学のために』第281号、2012年)は、同誌の特集「ヨーロッパ史における地域、国家、ネットワーク」の一部である。19世紀以来の非ヨーロッパ系(後年のカラード)の境遇の変化をたどるとともに、20世紀前半期のカラードとブリティッシュ・アイデンティティとの関係も概観し、本研究を進めていくうえでの足がかりを得た。

「19-20世紀転換期の南アフリカと法の混合」(『19世紀学研究』第8号、2014年)は、同誌の特集「法典化の19世紀」の一部である。南アフリカ連邦最高裁判所の初代長官(1910-14年)を務めたJ・H・デ・フィリアースが、ローマン・ダッチ・ローとイギリス法の混合をとおしてオランダ系とイギリス系の架橋を図り、そのことがカラードの排除につながったことを明らかにした。

『体罰の世界史 スポーツ・学校・国家』(共和国、2014年)に「南アフリカ史のなかの体罰と体刑」も執筆している。カラードのルーツのひとつである奴隷への体罰・体刑について言及した。

このほか、『西洋史学』第242号(2011年)に井野瀬久美恵・北川勝彦編『アフリカと帝国 コロニアリズム研究の新思考に向けて』の書評、『イギリス文化事典』(丸善出版、2014年)に「ボーア戦争」「アパルトヘイト」の二項目執筆した。

また、「南アフリカと第一次世界大戦」のもととなるシンポジウムを2012年に、「19

-20世紀転換期の南アフリカと法の混合」のもととなる国際シンポジウムを同年に、「シシ・ゲール像の形成」のもととなる報告を2013年に現代史研究会でおこなった。

さらに、中学・高校への出前授業、高校教員を対象とするセミナーなども多数実施し、研究成果の社会的還元を努めてきた。

他方外国語での成果還元は、2012年の国際シンポジウムを除いて不十分となった。この点が今後の課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

堀内隆行、シシ・ゲール像の形成 20世紀南アフリカの一カラード・エリート女性をめぐって、女性史学、査読有、第24号、2014、頁数未定

堀内隆行、19-20世紀の南アフリカと法の混合、19世紀学研究、査読無、第8号、2014、21-23

堀内隆行、イギリス帝国、ケープ、南アフリカ、新しい歴史学のために、査読無、第281号、2012、25-37

堀内隆行、(書評)井野瀬久美恵・北川勝彦編『アフリカと帝国 コロニアリズム研究の新思考に向けて』、西洋史学、査読有、第242号、2011、76-77

〔学会発表〕(計3件)

堀内隆行、シシ・ゲール像の形成—20世紀南アフリカの一カラード・エリート女性をめぐって—、現代史研究会、2013年11月30日、法政大学

Takayuki Horiuchi, Comments on “The Remarkable Survival of Roman-Dutch Law in Nineteenth Century South Africa” Authored by Rena van den Bergh, Society of the Nineteenth Century Scholarship, 4 February, 2012, Niigata University

堀内隆行、19世紀の終焉 南アフリカと第一次世界大戦、シンポジウム「帝国をいつくす 第一次世界大戦と植民地統治」(第一次世界大戦の総合的研究) 2012年1月28日、京都大学人文科学研究所

〔図書〕(計3件)

堀内隆行他、丸善出版、イギリス文化事典、2014、頁数未定

堀内隆行他、共和国、体罰の世界史 スポーツ・学校・国家、2014、頁数未定

堀内隆行他、岩波書店、世界戦争(現代の起点第一次世界大戦第1巻)、2014、256

〔その他〕

出前授業(2011年度新潟明訓高等学校・見附市立西中学校、2012年度見附市立今町

中学校、2013 年度福島県立会津学鳳高等学校)

高校教員を対象とするセミナー(2012 年度新潟市 2 回上越市・さいたま市各 1 回、2013 年度新潟市 2 回)

教員免許状更新講習(2011・12・13 年度新潟大学各 1 回)

堀内隆行他、新潟大学教育学部人間社会ネットワーク講座、社会の学び方、2013、189

大学入試センター教科科目第一委員(2011 年度)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

堀内 隆行 (HORIUCHI, Takayuki)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授  
研究者番号：90568346

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし